



羅針盤

溝口 昌子
Mizoguchi Masako

聖マリアンナ医科大学名誉教授



診療，この大切なもの

これまで、Visual Dermatology に掲載される名前の付された特集「セレクション」を、執筆された先生方の個性あふれる違いを楽しみながら拝読してきた。大原國章先生から思いがけずこのセレクションの依頼をいただいたときは、大変嬉しかったが、お引き受けしてよいものかどうか迷った。理由は2つある。一つは、闘病中であったため途中で挫折してご迷惑をかけるのではという心配と、もう一つは、私が自分ではほとんど臨床写真を撮らなかったためである。東京大学にいたときは写真室のカメラマン田川さんに、帝京大学在職中は高橋久教授のご教育により名カメラマンに育った医局秘書の故・光星広美さん（通称みっちゃん）に、聖マリアンナ医科大学では私の診療に同席してくれた若い同僚をお願いして撮ってもらっていた。

聖マリアンナ医大では「写真コンファランス」と称して、供覧した臨床写真から考えられる疾患をあげてもらっていた。診断に文句を言うだけでなく、「構図が悪い」、「フォーカスが甘い」、「バックが悪い」などと好き勝手に注文をつけた。そのためなのかはわからないが、失礼ながら写真室の田川さんの写真よりすばらしいものが撮れるようになったと思う。

学生時代には精神科に進むつもりであったが、ポリクリで精神科の患者さんと対峙したときに、私のような体育会系(?)単細胞人間には太刀打ちできる分野ではないと、すぐ挫折してしまった。絵を見るのも描くのも好きだったためもあるが、インターン時代のアルバイトでみた色彩豊かな皮膚病に魅せられて皮膚科を選んだ。以来50年近くになるが、臨床も研究もいまだに興味尽きない。皮膚科学

を選んだことに後悔はない。日々の診療から浮かんだ研究のアイデアも多い。

多数の疾患の診療をしてきたので、「セレクション」に何を選ぼうかと選択に迷ったが、比較的稀な疾患のなかから経験した症例数の多いものを選んだ。Part 1ではBehçet病とSweet病を取り上げた。ともに発熱、関節痛などの全身症状があり、しかも特徴のある皮疹から、診断には皮膚科医が重要な役割を演じている。他科からの診療依頼があると「皮膚科医の腕のみせどころ」と張り切って診察していた。おまけに両疾患とも日本に多く外国に少ないため、論文にすると受理されやすいというおまけまでついた。Part 2では東洋人に多い真皮メラノシスを取り上げた。臨床に興味をもち多くの症例を集めて発症機序を考察しているうちに、メラノサイトの分化への研究に繋がった。Part 3では皮膚科医だけでなく小児科医もが誤診しやすい小児皮膚筋炎を取り上げた。スライドだけ残っていて詳細不明の症例も入っているのをお許しいただきたい。

治療で白血球が減少したときに、皮膚病が感染する可能性があるから診療をやめるよう主治医に言われた。感染しない疾患がほとんどであることと、診療は私の生き甲斐であることを告げて、細々ながら仕事を続けている。今は前にも増して診療が楽しいし、充実感がある。

長い間皮膚科の臨床医として働けた喜びをかみしめながら、診療した患者さんたちを思い出しながら、執筆させていただいた。ご指導いただいた先輩、苦勞をともにした同僚、そして私を支えてくれた友人・家族、とりわけ夫に深く感謝している。